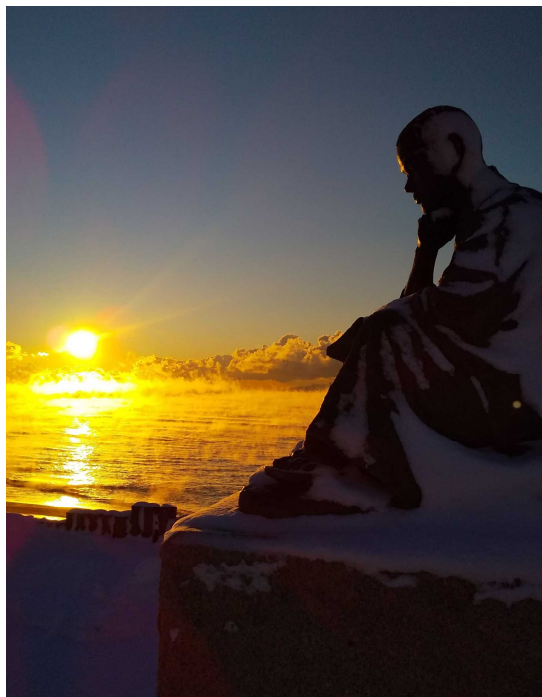


新年、津軽海峡に思う。



左の写真は、数年前のお正月、早朝ジョギングの際に撮影しました。

大森浜の啄木小公園で撮ったもので、雪が張りついた石川啄木の像を右手に、おだやかな津軽海峡に発生する気嵐（けあらし）のなかを朝陽が昇っていく場面です。私のお気に入りの1枚です。

ところで、この津軽海峡は一部公海で、どこの国の船や潜水艦でも自由に往来しています。もちろん核兵器等を搭載したものも往来しています。本来なら領海12カイリが適用でき、外国船などの航行を制限できるところなのですが、現在は、高度に政治的な判断の下、領海3カイリ（5.6km）として特定海域（幅）8.3kmを設けて公海としています。

また、このあたりでは国際政治情勢の変化にともない、昨年も西から東へ、外国のミサイルが国土を越えて太平洋まで飛来してきています。それに伴い、遺愛学院の幼稚園でもミサイル対応の避難訓練を始めましたが、ミサイルが運よく逸れて近くに落ちたときの爆風に備えての訓練しかできません。

そのような中で、政府は原発の再稼働・新設を宣言しました。電力状況がひっ迫してきたことへの対応なので、再稼働についてはある程度やむをえないところもありますが、下北半島にある大間原発建設の凍結解除ということになると、きわめて心配です。

完成したときには、まずミサイル飛来が心配です。絶対に大間原発に落ちない、狙わないという保証はありません。建設中の大間原発は世界初のフルMOX（プルトニウムとウラン混合燃料）の原発で、もしものことがあった時の被害は甚大です。また、ウクライナの例を見るまでもなく、政治情勢の変化から、津軽海峡の公海部分から大間原発への外国軍隊によるテロ行為も十分起こりえます。現在は自衛隊が守る体制もできてはいません。さらに、近くの海底に長大な活断層の可能性があり大地震も起こりえます。

青森県の全人口は125万人ですが大間原発30km圏内には2万2,000人が住んでいます。それに対して函館市の全人口25万人が大間原発30km圏内に住んでいます。何か有事があった時には、函館の人たちの避難はほとんど不可能です。でも今まで函館市民の意向を聴く機会はほとんどなく、建設が進められてきました。啄木は、今の津軽海峡についてどのように思いをめぐらしているのでしょうか？

2023年1月1日